

令和7年11月総評

西躰 かずよし

秋と数字の媒体として立ちつくす
古本市に消えそうなひと

石村 まい 兵庫県

何かの媒体になる。つなぐものとしての存在。表舞台に立つことはない。作品は「秋」や「数字」という抽象をつうじて感傷を超えたものになる。すべてを「秋」と「数字」に委ねるとき、人は消えることを当然のこととして甘受するのだろうか。

履き潰すバレエシューズを
本物の光の繭として胸に抱く

常田 瑛子 山口県

バレエシューズが光の繭になる。それはある種、痛みをともなう作業かもしれないと思う。淡々とした筆致が、履き潰すまでのながい時間を表現する。胸に抱かれるバレエシューズ。永遠の褥。

トルストイ
さがし泳げば
図書室に満ちる和音のような真空

さいう 石川県

トルストイをさがすために泳ぐ。安易な決断のように。けれど、「さがし泳ぐ」という行為が、すべてを清算してくれるわけではない。「さがす」「泳ぐ」、「和音」「真空」など、飛

躍したイメージの接続が、語り手の切迫感を伝える。図書館に満ちる真空は、どうしようもないほどの和音の美しさと、行き場のなさを証明する。

冬の朝
あなたの母語の音階で
少しふくらむわたしの名前

川上 真央 東京都

あなたとわたしの関係。決して分かり合うことはないけれども波のように干渉しあう。国外にルーツを持つかもしれないあなたと、親密なわたしとの関係性が、名前と、母語という二つのことばで伝えられる。

冬の朝、あなたの母語がわたしの名前へと、とどくようにと。呼ばれることで美しくなるようにと。そうしたちいさな鼓動が、いろとりどりのかたちをつくる。

たくさんの言わないことで
満ちていた
立冬の日の月は低くて

波津 ゆみ 神奈川県

ことばにならないことだけが、やさしさを主張できるのかもしれない。ことばにならないことだけが、悲しみをつたえられるのかもしれない。「言わないことで／満ちていた」という逆接的な一節が、それらを表現する。語り手は、低く置かれた月の息遣いを今日もそこで聴く。

髪の香の向うのひとに貸すカフカ

白鳥 陽太 神奈川県

髪の香りの向こうの人はどこへ向かうのだろう。「香の向うのひと」という表現が、こちら側と、向こう側とのとお断絶を表す。ここでカフカの本は、それをつなぐ橋梁の役割を果たす。こちら側の呼吸を、向こうの人へ届けるという確かな役割。

聖典の模倣のような冬の夜の
すべてが可燃性だったこと

高遠みかみ 大阪府

それほどまでに燃やし尽くす必要があったのだろう。その夜は、いつものように十分に痛ましかったのだろう。聖典そのものではなかったから。模倣でしかなかったから。そうしたうしろめたさを感じながら、冬の夜を燃やし尽くすものとするほかに、救いはなかったのだろう。

就寝前、可愛くなりたいと思った
レンジするみたいに眠る

川谷 沁 京都府

レンジでチンするような眠り。とても簡単な。それが心地いい。就寝前のかわいくなりたいという願いが、日々のとりとめもない願いに重なる。それを可能にしているのは「レンジするみたい」という、くだけた表現だろう。きっと登場人物は思う。明日もいいことがありますようにと。

骨二百六個を納め終えた日の
口座解約の朱肉あざやか

曾我 門出 新潟県

納骨の日の口座の解約。大人の骨の数を書くことで、だれもが逃れることができない死

について思い出す。朱肉が、すべてを覚えているかのように錯覚してしまう。そのいろのあざやかさ。

何でもないよ、と言う
少し濃いカルピス

藍河結音 京都府

「何でもないよ」という一節に、多くのことばをつめる。花束のように。「心配しないで」とか「もういいよ」とか。そうしたことばが、出会いがしらの明るさのように感じられるのは、作品が飾り気のないところから語られるからだろう。ただ口の中に広がる、いつもより少し甘いカルピス。